

## 自著を語る



A5 判並製・248 ページ

ISBN : 978-4894642683



けやきの木保育園の平松知子さんと  
(2020年2月11日)



山梨大学教育学部附属幼稚園でのつどい  
(2020年1月31日)

## 『保育的発達論のはじまり』

～ 個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ ～

川田 学 著

ひとなる書房 2019年8月刊 2,000円+税

- 本書は、「なぜ、発達がさきで、保育があとなのか」という、知人保育者の素朴な疑問を考えるところからはじまります。
- 子どもの発達を考えることは、いまも保育にとって重要な側面ですが、すこし立ちどまって考えるべき時代にきているように思います。発達から保育を考える前に、150年の歴史において、保育は何を大切にし、どのような価値を実現しようとしてきたのかを考えます。
- そのキーワードは、「つながり」であり、「主体性」です。
- 私たちの社会が変わっていく中で、人びとにとっての「発達」の意味も、「保育」の社会的意味も、変わってきました。現代の、また未来の保育は何をめざしていくのか。それを考えるために、実践に学び、発達理論の変化を理解し、日本社会と子育て環境の歴史を見わたします。
- この本は、「読者」と「著者」をつなげることも意図して編まれました。「読みあい、語りあう文化」が、保育の質の根底を支えてきたはずですが、そのいとなみがやせ細っていることに危機感をおぼえるからです。刊行後、これまで東京、山梨、京都・滋賀、名古屋で「読者と著者のつどい」を開催してきました。いまは、コロナのために中断しています。
- コロナ後（ウィズ・コロナ？）の社会と保育にとっても、本書が何がしか意味を持っていたらうれしいです。（川田 学）

### もくじ

- 第1部 子どもの「主体性」とは何か
- 第2部 子どもの「主体性」はどう育つか
- 第3部 「子ども観」「発達観」の変遷と私たち
- 第4部 発達をみる目をひろげる—イヤイヤ期とブラブラ期
- 第5部 「保育」と「発達」を結びなおす